浮世絵館だより

藤沢市
藤澤浮世絵館

2022 年
5 月
WEB 版

美人東海道の風景にみる 国貞と広重のつながり

「美人東海道」という愛称で親しまれている歌川国貞（三代豊国）（一七八六－一八六五）の「東海道五十三次之内」は、天保四年（一八三三）頃に作られました。背景に東海道の各宿場の風景、手前には女性が各地に関連した風俗で描かれ、宿場と女性の間は雲で隔てられています。紙の大きさは中判で、浮世絵の一般的なサイズである大判の半分です。中判にする目的は、版木や紙の節約になるのと同時に、土産物として携帯するのに便利な大きさでした。

美人東海道の背景には、歌川広重（一七九七－一八五八）の代表作「東海道五拾三次之内」（通称：「保永堂版東海道」）を引用する図が多数含まれることが特徴です。しかし、宮から京都まで（四日市除く）は複数の名所図会（江戸時代のいわゆる旅行ガイドブック）からの引用がみられます。これについては、国貞の作品が広重の作品に先行して出版されるようになったためではないかと推察されています。

当時、国貞（三代豊国）は既に江戸で美人絵と役者絵で人気を得ていた浮世絵師でしたが、引用元となる保永堂版東海道を手掛けた広重は、まだ知名度の低い絵師でした。一説によると、版元が国貞人気にあやかって保永堂版東海道を宣伝するため、国貞に依頼して描いてもらったといわれています。そのためか、美人東海道の落款には「応需　国貞画」と記されている図が多数あり、国貞が「求めに応じて」制作したことを鑑賞者に伝えています。

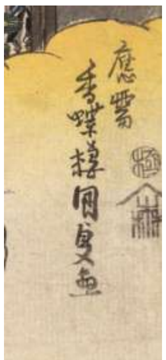
本展示では、美人東海道と共に保永堂版東海道（戸塚、藤沢の図以外は高見沢版画研究所による復刻版）を並べて展示しています。両図の共通点や相違点を見比べながら、美人東海道に描かれた風景や女性たちの装いをご覧ください。

歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次之内　吉原図」

国貞の美人東海道と広重の保永堂版　一体何が**つながっている**！？

美人東海道と保永堂版東海道を「見比べる」

歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次之内　江戸日本橋之図」



「香蝶楼国貞画」と記された落款の横には「応需」の文字。

「東海道五十三次之内　江戸日本橋之図」の背景は広重の保永堂版東海道「日本橋　朝之景」の構図を用いています。広重の作品では橋の上に大名行列の出立風景が描かれますが、国貞は橋の上は荷を満載した大八車、橋の手前は天秤棒を担いだ棒手振りを描いています。

また画面左上には富士山が書き加えられ、正月の風情でしょうか、並ぶように凧が揚がっています。手前の女性の振り袖の柄も梅で、正月にふさわしいものとなっています。

美人東海道は、保永堂版東海道の構図を取り入れつつ、国貞オリジナルの工夫が巧みに施されています。二図を見比べることで、それぞれの描き方の違いをお楽しみ頂けます。

歌川広重「東海道五拾三次之内　日本橋　朝之景」
（高見沢版画研究所による復刻版）

美人東海道と名所図会を「見比べる」

歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次之内 宮之図」

秋里籬島 著「東海道名所図会 巻ノ三 宮」

宮宿は熱田神宮の門前町で、「東海道五十三次之内　宮之図」の画面左手には見切れるように鳥居が描かれています。国貞は、宮宿から名所図会（江戸時代のいわゆる旅行ガイドブック）を参考に宿場の風景を描いたと言われ、本図では東海道名所図会（一七九七）の宮の図を参考にしています。

東海道名所図会では、浜鳥居一帯の地域を俯瞰的に捉えています。国貞は、○印をつけた箇所の視点からを参考に風景を捉えたのではないでしょうか。帆を広げようとしている船の図案などは、国貞のオリジナルと思われます。手前の女性は右手に神事で用いる神楽鈴を持ち、熱田神宮の巫女に扮したものでしょう。

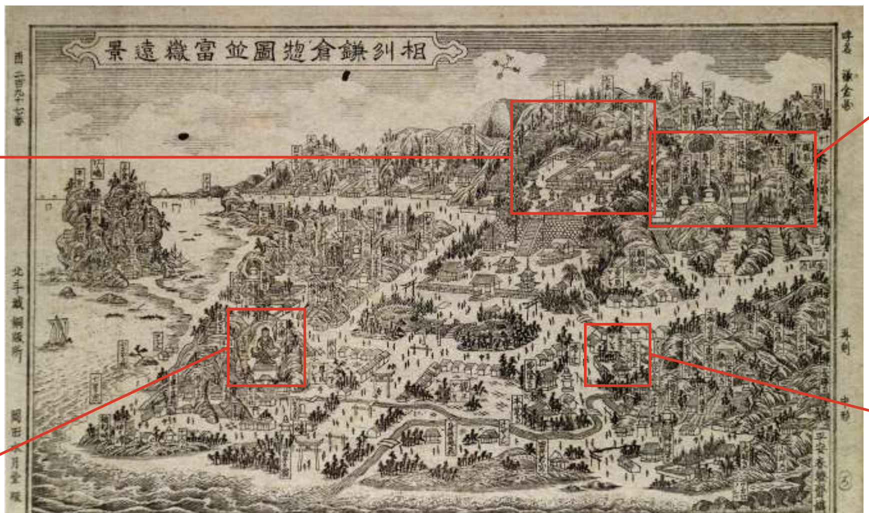
国貞と広重の「つながり」

国貞は広重よりも十歳年上でしたが、ようやく浮世絵師として第一線で活躍できるようになった広重を応援する気持ちもあって、美人東海道に保永堂版を引用したのかもしれません。すでに国貞は浮世絵界の大スターであったため、保永堂版の売れ行きは国貞の知名度による効果もあったことでしょう。

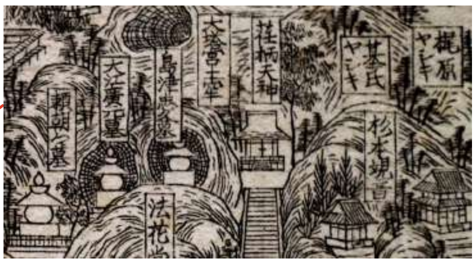
実際、二人は仲が良かったようで国貞と広重の合筆である東海道の宿場を描いた「双筆五十三次」（一八五四）は国貞が人物を、広重が背景を描いています。さらに、年下の広重は先に亡くなってしまいますが、国貞は広重のために追悼の肖像である死絵を描いています。国貞と広重の強固な「つながり」の軌跡は作品を通じて、現代の私たちも確認することができます。

歌川国貞（三代豊国）歌川広重
「双筆五十三次 藤澤」

あっちはビジンでこっちはミジンだ！
ピックアップ　銅版画家　岡田春燈斎（おかだしゅんとうさい）の微塵絵（みじんえ）



岡田春燈斎「相州鎌倉惣図並富嶽遠景」（9.5×14.4cm）


▲▼顔をよく近づけないと見えないほど小さい文字がびっしり。

日本の銅版画

銅版画には大きく分けて直刻法と腐蝕法があります。今回は日本における腐蝕法の銅版画についてご紹介します。

日本の腐蝕銅版画は司馬江漢によって開発されました。享保五年（一七二〇）に漢訳洋書の輸入が緩和されたことで、江漢が西洋の腐蝕銅版画の説明を解読したり独自に工夫を重ねたりした末にできたといいます。

江漢が開発した銅版画はその後浮世絵にも影響を与えますが、洋学の取締まりなどが原因となり江戸では衰退していきます。一方で洋学に対して締め付けがゆるやかであった京都では盛んに生産されるようになりました。

その京都の銅版画家の中に、初代玄々堂の松本保居という人物がいます。初代玄々堂は細かい表現を得意とする銅版画のなかでも特に細かい微塵絵を制作していました。

岡田春燈斎

岡田春燈斎は京都で初代玄々堂に学んだとされる銅版画家です。やはり微塵絵をよく手がけました。今回の展示でも実に細かい、春燈斎の微塵絵を展示しています。どれほど細かく描かれているか、ぜひ展示室でご確認ください。